

Web 2.0 後のインターネットと 我が国で IT ベンチャーが育たない理由を探る

JFSC 特別顧問 飯田尚志

Web 2.0 の考え方については、文献[1]で詳しく記述されており、その文献を 2006 年 5 月の Space Japan Review (SJR) 編集委員会で紹介し、議論して頂いた後、SJR の Space Japan Opinion 記事としてまとめた[2]。Web 2.0 は Google の検索を基本として発展し、Tim O'Reilly が名付けたものであった。

Web 2.0 の後はどうなるのか考えるのは当然の成り行きであるが、post Web 2.0 は Web 3.0 となるのか、どのようなものなのかは興味があった。Web 3.0 はどのようなものかについて 2008 年末の日本経済新聞の記事によれば、今後の鍵を握るものとして 4 つ：①ソーシャル・ネットワーキング・サービス (SNS)、②オンラインゲーム、③ウィキと呼ぶネット上の情報共有、④ビデオ、が挙げられた[3]。また、文献[4]によれば、Web 2.0 の名付け親の Tim O'Reilly 自身が Web 3.0 という言葉は好まず、Web 2.0 の後を継ぐ新しい技術動向という意味では 3 つの流れ：①センサー技術の発達によるネット端末のインテリジェント化、②パソコンからモバイルへの流れ、③セマンティックウェブ（単なる言葉の集合体のウェブから情報の構成要素に意味付けをしてコンピュータが内容を理解できるようになること）を挙げた。

しかし、現在では必ずしもこの 4 つが全て post Web 2.0 と呼べるものになっているとは言えないと思われる。むしろ、Facebook の動きが Web 2.0 の次の大きな流れとなっているのではないかと考えられる。何故なら、Facebook で流れているデータは Web 2.0 の検索に引っかからない closed network であるからである。この点について最近、書評[5]が引き金となって文献[6]を読んだので、概要について記述し、併せて標題の後半部分、我が国で IT ベンチャーが育たない理由を探りたい。また、文献[6]によれば、Google、Apple などの IT ベンチャーの興隆には宇宙開発が重要な役目を果たしたということなので、JFSC の活動とも関連することを述べたい。

文献[6]に書いてあることは、少し難解ではあるが、概ね以下のことのようにである：

- Google, Apple, Facebook, Twitter..., 普段何気なく利用しているサービス全てに創設者の特異な思想や政治性が埋め込まれ、基本となる構想が全く異なるが、次に述べるような一貫性のある蓄積の基に発展している。
 - Apple の創始者の Steven Paul Jobs の Stanford 大学生への言葉：“Stay hungry. Stay foolish.” 「いつまでも自分が何をすべきかという目的に飢え、いつまでも後先考えずに何にでも手を出せるくらいバカであれ。」
 - Google の創設者 Sergey Brin による「邪悪になるな」という社是。
 - Facebook の創設者、Mark Elliot Zuckerberg の構想は、ウェルギリウスの『アエネーイス』に端を発している。そこに描かれた「永遠のローマ」という単線的な歴史観こそが、Facebook の成長モデル。
- アメリカ人の心性
 - フランス人の政治思想家アレクシ＝シャルル＝アンリ・クレレル・ド・トクヴィル (Alexis-Charles-Henri Clérel de Tocqueville)：アメリカ人は、社会集団を自発的に形成する心性がアメリカ社会にビルトインされている。
 - フランスの哲学者ジル・ドゥルーズ (Gilles Deleuze) (例えば、文献[7]参照) によれば、
 - ◇ アメリカは多様性と可変性からなる集団
 - ◇ 集団を作り替えていく力学を内部に抱えている
 - ◇ Counter Culture や Social Network に即している
- ネットワーク科学の 2 つの側面
 - インターネットやコンピュータの特性、複雑系科学との繋がり、サイバネティクスとも問題意識を共有
 - ネットワークの構造、グラフ構造、人間のネットワーク、社会学や人類学、構造主義的人

類学 (レヴィ=ストロース (Claude Lévi-Strauss) (例えば, 文献[8]参照)) との隣接性

- 影響を与えた2人の思想家
 - Stewart Brand: システム論的な発想を重視し, Whole Earth Catalog (WEC)を発行した。そこでは, サイバネティックスの始祖である Norbert Wiener (例えば, 文献[9]参照)) がブランドを突き動かし, 持続可能なコミュニティーを切望している人々がソフトテクノロジーによって個人によるパワーの出現を促進した。この whole earth (全球) の視点が技術開発の想像力, 社会変革の想像力を支えてきた。
 - Gregory Bateson: 世界は生態系として1つであるとし, ウィーナーのサイバネティックスに触発されて, マン・マシン系においてフィードバックの仕組みがあるものは全て「クリアトゥーラ (生あるもの)」と呼び, フィードバックの中に流れるものを「情報」と呼んだ。情報とは「差異を生み出す差異」と定義。これは現在のネットワークを介してマン, マシンが繋がっているものと解釈される。
- 全球の考え方
 - Google の Google Earth や Google Ocean 等のアプリケーション
 - Facebook はバーチャルなスペースコロニーを形作っている。
- IT 技術開発の全体性を担保したのは「宇宙開発」という目標であった。「全球」という視座からウェブを眺めれば, 基本的構想の違いが見て取りやすくなる。そこで繰り返し問われる「人間とは何か」という問いこそが, 常にウェブ思想の根底をなしてきた。
- 宇宙開発という夢が全ての出発点
 - PC も Web もこの夢の副産物
 - Cloud Computing も

さて, 残された課題として我が国で IT ベンチャーが育たない理由であるが, これは何年か前の郵政記念日式典で自民党の世耕弘成議員が挨拶の中で, 何故日本には Google のような IT ベンチャーが育たないのか考える必要があるという趣旨のことを言及していたことが気になっていたものである。そのときは, 我が国にベンチャーが育たないのは, 当時一度失敗すると再起できない制度などが問題だとされていたので, その解決を目指したものではないかと想像した。しかし, 上に述べたことから, 米国においてはジル・ドゥルーズの見解や米国東部の大学におけるウィーナーから受け継いだ IT 技術の蓄積に基づき, さらにブランドやベイトソンなどの系統だった蓄積があり, その上でシリコンバレーの自由闊達な雰囲気の中からネットワーク関連のベンチャーが育ったということで, しかも, このシリコンバレーを創設し, 支えるのが, 米国の宇宙開発であったということであった。このことから, 我が国では系統だった蓄積の欠如に加え, 本格的宇宙開発が行われてこなかったことが IT ベンチャーを育まない理由だと思いついた次第である。皆様はどう思われますか?

参考文献

- [1] 梅田望夫: “ウェブ進化論 - 本当の大変化はこれから始まる”, ちくま新書, 2006.
- [2] 飯田尚志: “[Space Japan Opinion] Web2.0 と衛星通信技術”, Space Japan Review, No. 50, Dec./Jan., 2006/2007.
- [3] “「Web 2.0」広がる商機 討論「ポスト Web2.0 社会を探る」”, 日本経済新聞(朝刊), 2008年11月6日.
- [4] 関口和一: “来るか「Web3.0」 世界のイノベーターに聞く 4 Web2.0 提唱者 オライリー氏 コンピューターに理解力 モバイル端末, 人の所在把握”, 日経産業新聞, 2008年1月8日.
- [5] 斎藤 環: “ウェブ X ソーシャル X アメリカ <全球時代>の構想力 池田順一 <著> ウェブ思想の根底なす問いとは”, 朝日新聞(朝刊), 2011年6月5日.
- [6] 池田純一: “ウェブ X ソーシャル X アメリカ <全球時代>の構想力 X”, 講談社現代新書, 2011.
- [7] ジル・ドゥルーズ, フェリックス・ガタリ, 市倉宏祐 訳: “資本主義と分裂症 アンチ・オイディプス”, 河出書房新社, 1986.
- [8] クロード・レヴィ=ストロース 大橋保夫 訳: “野生の思考”, みすず書房, 1976.
- [9] ノーバート・ウィーナー, 鎮目恭夫訳: “サイバネティックスはいかにして生まれたか”, みすず書房, 1956.